「日々の理科」（第 3154 号）　2023,-3,26

「最後の春みつけ（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

子どもたち・・・特に女児は花を見つけて「小さな花束」を作ることを好むが、一番の目当ては、やはり「虫さがし」である。しかし、暖かい日が続いた３月下旬とはいえ。昆虫の姿はまだ少ない。

それでも、シロチョウの仲間は飛び始めていた。子どもたちは捕虫網は持っていないが、チョウを追いかけて走り回る子どももいた。少ないチョウはあきらめて、穴をほってダンゴムシを探す子どもも多かった。

この日も、希望者に R-1（小さな乳酸菌飲料）の空き容器を配っておいた。主に小さな虫を入れるのにちょうどいいだろうと思っていたが、子どもたちはその中を花で一杯にしていた。教室に戻ると、なぜか水で満たす子どもが多い。理由を聞くと「香水を作れるかもしれないから」という返事だった。

こういう観察場所では、安全管理以外に教師の出番はあまりない。「自然環境」そのものが、優秀な教師の役割をするからだろう。子どもたちは、見つけたものや、草花からつくったものを教師に見せに来るので、それに共感してあげることぐらいだろう。

「新イタドリ広場」の一角に、幼児（ナーサリーや子ども園）の子どもたち用の「あずまや」のような建物がある。１年生はそこに草花や石（頁岩やホルンフェルス）を並べて「お店やさん」をやっていた。

大学講堂の中庭には、見事なシダレザクラがある。今年は卒業式の日に美しく咲いていた。小学校から近いので、ここに「花見」に来たクラスもあった。